

# 「ゆきみのり」

## 【品種の特徴】

- 出穂期及び成熟期は「わたぼうし」並みの早生のもち種。
- 耐倒伏性はやや強。
- 穂発芽性はやや易。
- いもち病ほ場抵抗性は、葉いもち、穂いもちともに中。

## 【生育のめやす】

生育ステージ	葉数 (葉)	草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	葉色 (SPAD)
最高分げつ期・幼穂形成期 (6月30日頃)	9.5~10.5	50~55	550	38~41
2回目穂肥時(7月8~11日頃)	11.0~12.0	64~68	530	40~43
出穂期(7月22~25日頃)	12.0~13.0	稈長83	490	39~42

## 【収量構成要素のめやす】

目標収量	660kg/10a
穂数	490本/m <sup>2</sup>
一穂粒数	82粒
m <sup>2</sup> 当たり粒数	40,000粒
精玄米粒数歩合 ※	78%
千粒重	21.0g

※ 精玄米粒数歩合は、玄米1.85mm以上粒数/全粒数

## 【主な作業と生育ステージ及び管理のポイント】

時期	4月		5月				6月				7月				8月				9月			
	20		10	20			10	20			10	20			10	20						
主な作業と生育ステージ	は種		田植え				中干し				穂肥 幼穂形成期		穂肥		出穂期				落水		収穫 成熟期	

基肥施用	田植え	中干し・溝切り	病虫害防除	穂肥施用	収穫・乾燥・調製
<ul style="list-style-type: none"> <li>・基肥量は窒素成分で5kg/10aをめやすとする。</li> <li>・地力が高いほ場では基肥を減肥し、大豆跡は原則として基肥を施用しない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・田植えは5月上旬に行う。</li> <li>・栽植密度は60株/坪以上とし、穂数が不足するところでは70株とする。1株苗数は3~4本とする。</li> <li>・鳥害を回避するためほ場の団地化を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中干し・溝切りを実施し、一度田面を固めて収穫時の機械作業が可能な地耐力を確保する。</li> <li>・中干し後、出穂前は稲体活力が低下しないよう土壌を乾かさないようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・葉いもち防除は、必ず育苗箱施用により行う。</li> <li>・穂いもち防除は、予防防除を行う。</li> <li>・斑点米カメムシ類の防除は、草刈り及び加害種に応じた薬剤防除を行う。</li> <li>・出穂が早い場合、雀害対策を適宜行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・穂肥は出穂期23~21日前と14日前の2回に分けて施用する。</li> <li>・1回目は、幼穂形成を適時確認して施用時期が遅れないよう注意する。</li> <li>・穂肥量は窒素成分で1回目を4kg/10a、2回目を2kg/10aをめやすとする。</li> <li>・穂肥施用時の生育がめやすを大幅に超える場合は、施用量を控える。</li> <li>・出穂期25日後まで飽水管理を基本とする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・収穫適期は黄化粒割合が85~90%になった頃であり、積算温度1,000℃をめやすとする。</li> <li>・胴割粒の発生を防止するため、乾燥は適正温度で行い、急激に乾燥させない。</li> <li>・篩い目は1.85mm以上を使用する。</li> </ul>